

人とつむぎ、 織りなす日々のなかで 高齢期の発達

最終回 他者と支え合って生きる

いよいよ最終回です。連載では、もみじ・あざみの10名の方に登場していただき、高齢期に直面する老いや死に悩みながら今を生きる姿について紹介してきました。また、「(株)なんてん共働サービス」のとりくみは、たとえ認知症になっても、住み慣れた地域、場所、慣れ親しんだ人たちとのつながりのなかで生を全うできる暮らしがめざされていました。

高齢になれば、誰もが心身の状況や身近な人との関係、所属する集団社会での役割などを喪失する体験を経ることになります。高齢期が衰えと喪失の変化を受け止める過程で悩みながら自分を見つめ直し、それまでとは異なる付き合い方を探り学んでいく時期であることを、もみじ・あざみのみなさんが見せる姿から気づかされました。これまでに紹介したみなさんが自分の衰えや身近な人との別れ、しごとの役割変化などに悩みながら向き合っていく姿は、同じ施設の中で暮らしていても一人ひとりの物語があつて、老いや死を実感す

らの自分でできることを大切にしたいねがいを持ち日々を過ごすようになっていきます。

もみじ・あざみの旧職員会が発行する今年度の会報誌に石原繁野さんが寄せた原稿の一部です。

「八十一歳のナツコさんの手紙には、自分の老いをきちんと受け止め、老いを生きる姿勢を読み取れます。ナツコさんは、十八歳で入寮した言葉は理解できるが言葉を発することのできないサトコちゃんの成長を、姉のように寄り添って見守ってきました。ナツコさんの手紙には『サトコちゃんは五十一歳になりました。もうギャーギャー大声を出さなくなりました。おとなになりました。なんでも一人でできるようにになりました』と評価し、『ユミコちゃんが、私の代わりが出て来ようになりました』と、大切な親友に自分の役割を託しています」と、今は自分の育ててきた、若い人たちに助けてもらう暮らしであること、そして『私はむすび織をがんばります』と、今も人々に評価されている織物をする。老いをしっかりと受け止めた生き方を示しています」

ナツコさんが自分自身を高齢者として意識しているかはわかりませんが、大切にしてきた人たちに助けられて生きる自分の今に、意味を見出していることがわかります。自分の役割を担ってくれるようになった友だちの変化、騒いで世話が必要だった若い人の成長を実感する今は、ナツコさんができ



張 貞京

ちゃん ちよんきよん / 京都文教短期大学准教授。共著に『保育者のためのコミュニケーション・ワークブック』（ナカニシヤ出版）。

る状況もタイムミングもちがいます。しかし、その物語から、知的障害の有無や入所施設というちがいを超えた、高齢になつていく私たちへの示唆を読み取ることができそうです。最終回は、高齢期の発達理解と支援のあり方について、紹介してきたみなさんの例から考えてみたいと思います。

■高齢期の悩みに向き合っていく

5月号のナツコさんは、高齢期のさまざまな喪失が、生涯発達において築き上げてきた発達の姿を自ら振り返って意味づけ直し、他者とのつながりのなかで生きていることを見つめ直す契機となることを教えてくれます。

ナツコさんは一人でやりたいことを止められて不満を漏らしていました。実際、暮らしのすべてを一人でこなしていくのはむずかしくなっています。しかし、ナツコさんはできなくなった悩みをもったことで、新たな気づきを得て、これか

■他者に想いを伝える

先ほどの原稿を、石原さんは「コロナ禍であることで知ることのできた、宝物でした」と締めくくっています。退職後も織物工房をボランティアで手伝っていた石原さんは、直接見るナツコさんの衰えを心配したそうですが、コロナ禍で会えず、手紙のやりとりを始めてから、ナツコさんがユミコさんやサトコさんに助けられながら暮らす今を前向きに受け止めていることを知ったといいます。

ナツコさんに対して石原さんが返す手紙には、サトコさんを大切に導いてくれたこと、がんばってこられたナツコさんへの感謝が綴られているそうです。知ってほしい、共感する相手に手紙を書き、伝える作業そのものが、ナツコさんにとって今を見つめ直していく過程であるのでしょうか。そのなかで、今までの自分と身近にいる大切な人との時間を振り返り、自分と周りの変化を見つめ直し、その付き合い方を探り学んでいるように思います。

手紙のやりとりは遠く離れた相手に想いを寄せ、自分の気づきや考えを相手と確かめあうことができます。たとえ、文字が書けなかったとしても、共感する相手と共に振り返りを重ねる過程で、自分の気づきや考えを深めていくことができ